

第 13 回事故対策会議報告

教育遭対部長 中川和道

第 13 回事故対策会議は 2017 年 2 月 7 日 19 時から連盟事務所で開催され、10 の山岳会から 28 名が参加した（末尾の表を参照）。会議の冒頭に、園 敏雄理事長から「事故の経験を広め再発防止に向かおう。吊るし上げでなく事故の分岐点を探ろう。」とのあいさつと、「新特別基金事務局に事故一報を送ったらそのコピーを OWAF にも下さい。分析をしますので。」との訴えがなされた。その後、個々の事故の分析が大阪労山ニュース 2 月号の番号で 7→4→11→5→7 の順に中川の司会で行われた。以下、順にまとめる。

No.7 7 月 23 日 14 時 50 分頃 TK(男性)65 豊中勤労者山岳会 尾瀬 燧ヶ岳

山行初日 23 日の燧ヶ岳の下山時に 3 合目付近で滑りやすい湿った土の急斜面を下るさい、右足を着いて左足を下におろしたが左足が滑って体が前に行き、残った右足首が内側に 90 度以上曲がりボキッと音がした。バランスを崩しながら着地したが右足に力が入らず転倒した。同行者が 23 日の宿泊先である長蔵小屋に連絡。折り返し尾瀬沼ビジターセンターより尾瀬沼の近くまで負傷者を下山させて下さいと連絡あり、負傷者を担いで下山途中の林道でビジターセンターの職員 1 名が急いで登って来られて合流。TK さんの怪我の状況を確認されてから無線でビジターセンター中継でヘリでの救助を要請して頂いた。防災ヘリが 17 時 20 分頃に到着し会津中央病院に搬送された。翌 24 日弟さんが迎えに来られ大阪へ帰られた。25 日月曜に淀川キリスト教病院へ入院。右足首（脛骨 2ヶ所）右膝下（腓骨 1ヶ所）骨折。手術ののち 8 月 10 日退院。10 月まで通院予定。

豊中労山が作成した事故原因調査表など 3 ページの資料をもとに報告のあとと討論。会は原因及び対策を行動面、設備・環境面、管理面心理面について分析し、事故に至る原因として、(1)山行前の訓練が 1 か月前でそれ以降は平地歩きのみという訓練不足、(2)ザックが 14kg と重かった、(3)ストックを持っていたのに使用しなかった、(4)1 か月前に購入した眼鏡が不調で下りでは足元が見にくかったなどがあげられ、同じ問題を自分もかかえたことがあるとの議論が弾んだ。

会場から関心を集



めた教訓は、3ヶ所もの骨折に対し、もと医療関係の会員が的確な処置を行ったことであった。すなわち、(a)靴をはかせたまま、(b)ストックと紙パックの厚紙と粘着テープで、(c)骨折部位の下の関節から上の関節にわたって、(d)30分以内に固定した。このおかげで手術を回避できたと病院での指摘があったという。

ストックを使って安全に歩くには事前によく練習することが必要との有用な指摘もなされた。下りのスリップやつまづきの防止には山本正嘉先生講演で紹介された早い小刻み足踏み準備運動をしてから下りにかかるとよさそうである。また、TKさんはリーダーで先頭を歩いていた。上記(1)-(4)の問題を抱えての先頭引率リーダーはやや負担が大きかったのではないかとの意見もあった。

No.4 4月24日11時30分頃 MT(男性)60 きたろうハイキングクラブ

虚空蔵山(篠山市三田市 596m)に向かう途中にある虚空蔵堂への登りの登山道で転び、右手をついた。その際、右手親指の爪と皮膚の間に土が入った。仲間にテーピングをしてもらった。腫れと痛みがあったが歩けたので荷物は全て持ってもらい山行を続け下山した。その後病院に行き、親指の爪を切り消毒をもらった。3回の治療で現在は完治。傷病名：腫れと化膿。

資料2ページによる報告のあと議論。右手をついた直後に腫れが生じたのは強く打ちつけたためと思われる。腫れと化膿が生じたことから傷の処置に改善が必要。この事故対策会議で何度も紹介されているように、傷口をまず洗い流すことが必要。ペットボトルの水を高い位置からやや激しい流水として300cc流すとか、水道水でもいい。お茶でないほうがいい。泉州労山の日高博さんは水道水を毎回持参。ペットボトルのふたに穴を開けたものをその場で取り付けて使用されておられるとの紹介あり。中川も100cc容器に水道水を入れ、洗眼(虫が目に入って閉口した経験から)や傷口流水に使用。今後広めてもいいのではないかと洗い流し不十分のままに傷口をふさぐと菌の培養みたいだとのリアルな指摘もあり、教訓的であった。

No.11 10月9日12時35分 SY(女性)67 きたろうハイキングクラブ

会主催の定期的秋山特別山行(34人参加)のうちのひとつ男体山頂上からの下山時、7合目-8合目のガレ場を下山中。事故者は真下の滑り易そうな岩を避け、水平方向の幅10cmの足がかりに左足を置いた。次に谷側の右足を少し先へ運ぼうとしたが、左足に引っかかってしまいバランスを崩し、体右側面から約1m滑落、さらに2m横転した。ストックは不使用だった。真後ろのメンバーには、足がもつれて滑落したように見えたとのこと。同行メンバーが患部を水で洗い止血処置後、4合目まで前後2人(始めはメンバー、合流後は救急隊員)に付かれ事故者は自力下山、待機していた救急車で病院搬送。傷病名：後頭

部裂創2針縫合，前頭部擦過創，右肋骨打撲。

きたろうハイキングクラブでは検証委員会を立ち上げ，検証が行われた。委員会による資料3ページの報告のあと議論。6時間行動のあとSYさんは足が絡むなど疲れと冷えを感じていたが遠慮して言い出せなかったので言い出せる環境をつくる必要がある。ストレッチやこまめな休憩も有用。

きたろうではこれまでリーダーは先頭を歩く先頭引率型リーダーが多かったが，これを機にパーティーリーダーは最後尾を歩き全体を見るのがよいのではないかという討論がなされているという。No.7の豊中労山のTKさんは先頭を歩く先頭引率型リーダーであった。豊中は先頭で連れて行く人，きたろうは最後尾で全体をみる人という対照的な問題提起に，大阪府連でもリーダー論の議論が始まったなど司会者は感じた。

No.5 7月17日11時30分頃 SS(女性)68 安治川山の会

荒地山山頂で昼食後，大谷乗越への下り10分くらいの山道を下山中，腰を下げ左足を伸ばして置いた岩場で転倒。左足首が正座したようになってしまって違和感を覚える。広場にてシップで応急処置をし，自力で歩いて下山したが，芦屋川駅に着いた頃には足首に痛みが出ていた。傷病名：左足関節ねんざ。

当事者が急きょ不参加。下りの事故なので食事後の冷えが効いたのか，ストック不使用の理由は何かなどの質問が会場からあったが，会では深い分析はしておらず詳細不明とのこと。再発防止のためには何が必要か，教訓は何かを会で議論していただくこととなった。ねんざとの診断でありながら6ヶ月後の今も通院中とのこと。ねんざと診断されたのにあまりに長引くので他の医者に診てもらったら「骨折です」と言われて治療をやり直した経験をかつて事故対策会議で紹介した他会の会員からは「別の医者にセカンドオピニオンを求めると良いのでは」との助言もなされた。後日，医師の診断はねんざであり，現在は完治したとの情報が寄せられた。

No.6 7月23日15時30分頃 KT(男性)65 くすのき山遊会 南アルプス大門沢

22日から白峰三山を単独登山し23日に下山。下山開始後約2時間の15時30分頃，16時までには大門沢着をめざして先を急いでいた。大きな段差にストックをつき左足をおろしたところ，左足とストックがすべり，尻もちの状態となったが，さらに尻がすべったため右ひざも引っ張られ，右足のくるぶし近くの骨がボキッと音をたてて骨折，転倒。後ろから来た3人の別パーティーの助力で大門沢小屋に到着。シップなど応急処置を行う。翌日24日の朝になっても腫れが引かず痛みもあり。6時10分ごろ小屋にヘリを要請。山梨県警のヘリにより8時50分ピックアップ。地元の病院では右外果（がいか：足の外側のくるぶし）骨折と判明。通院。診断は同じ。7/26入院，7/27手術。1ヶ月半ギブス，全治2

ケ月。

4 ページの資料による報告のあと議論。単独行だし年齢も加味して標準コースタイムの20%増で時間を計算したのになおかつ行程をこなしきれなかったという焦りが心理的一因であった。トレーニングの質問もあったが事前トレーニングは十分なされていたので、心理面での安定性が求められるとの感触であった。

教訓として関心を集めたのは、身延線や新幹線で電車に乗るさいに駅で「ヘルパー制度」を利用したことであった。駅で切符購入のさい「単独なので乗車の補助を」と申し出たところ3人のヘルパーがついてくれ大いに助かったという。OWAFで共有すべき教訓である。

電話の通話可能エリアについて、大門沢ではKTさんのソフトバンク携帯が通話不可で困った。ドコモは通話可、おおいに助かったという。入山前に通話可能エリアの情報を調べておくことを提案したい、とのことであった。会場では、森濱学さんがかつて配布した「ドコモ通話可能山岳エリア地図」を改めて配布された。中川からは「通話情報をOWAF-ML 交流しようという計画が教育連対部で進んでいる」と紹介があった。

ドコモの山岳での通話可能エリアは

<https://www.nttdocomo.co.jp/support/area/mountains/index.html?pref=kanto&mode=s>

で読める。山名をクリックすると地図が表示される。

単独行登山は禁止ではないかとの点も議論された。くすのき山遊会からは「一律に禁止ではないがフリーパスではない。山行計画を個別に詳しく検討して大丈夫なものは認めている」との回答であった。中川が知る範囲でもそういう会は多い。

参加者は10山岳会28名。内訳は、きたろう5、豊中5、くすのき3、泉州3、OWCC3、北大阪登ろう会2、安治川・ぼっぼ・モンテス・志峰会は1。